

オピニオン

妨げているのは家族の情

特別養護老人ホームの医師 石飛幸三さん



「平穏死」のために

無理な延命治療をせず、老衰を受け入れ穏やかに死を迎える「平穏死」を提唱する安芸高田市出身の医師、石飛幸三さん(80)。東京の特別養護老人ホームの常勤医になって10年が過ぎ、約300人の入所者をもとったという。新著「平穏死」を受け入れるレッスン(誠文堂新光社)を通じて平穏死を妨げているのは「家族の情」ではないかと投げ掛ける。その真意を聞いた。(聞き手は論説委員・平井敦子、写真・高橋洋史)

私「平穏死」を提唱して7年くらいになります。若い方から食べられなくなったらどうするのか。胃に栄養を直接送る「胃ろう」を安易に選んでいいのかと問い掛けてきました。ホームで胃ろうを付けられ、ものも言えずにただ横たわる多くの高齢者に接し、激しいショックを受けたからです。全国各地での講演は700回になります。私と同じような考えで発信する人も増えました。胃ろうを選ぶ人も少なくなり、変わってきた手応えがある。今までの延命治療は何かおかしいと、皆さん思うようになってきた。それでもね、まだまだ腹に

落ちていないんでしょうね。— どういうことでしょうか。延命治療をしないで、逝かせていいんだらうかと。後悔するんじゃないかと。そうやって悩む家族の方々に、日々接しておりますからね。家族には愛情がありますから。それが妨げになるんです。

— 著書では、老衰による死は「苦しまない」ということを強調していますね。苦しまないと分かれれば、家族はほっとしますから。実際ホームで立ち会わせていただく自然な最期は、例外なく静かで安らかです。食べられなくなったら無理して食べさせない。胃ろうなど余計なこともしない。するとなね、眠って、眠って、すーっと穏やかに旅立つんです。10年たって一つ確かなことは、みんな最期は眠っちゃうことです。私はホームで痛みを和らげるための医療用麻薬を使ったことが一度もない。必要ないんです。

病院では苦しい表情で亡くなる患者をたくさん見てきました。ホームで初めて自然な最期に出合いました。それでね、苦しめるのは余計な医療行為のせいなんだと気付いたんです。— ただ家族が情を抱くのはやむを得ないようにも思えます。別ればつらいでしょうし、命を少しでも延ばしたいと思うでしょう。でも厳しい言い方をしますと、それは「エゴ」なんです。本人のために何がいいのか、それを望んでいるのか、苦しめないのか、そのことを考えてみてもらいたいです。人間はいつまでも生きられない。医療には限界がある。効果の乏しいことに、どれだけ無駄をしているかも問題です。

— 確かに高齢化で、医療費は膨らみ続けています。周りから「医療費のことば言わね。厚生労働省の回し者と思われろ」と忠告されますが、本当のことを言わなくちゃいかん。胃ろうをしたら1人当たり年間500万円の医療費がかかります。元気になるんだったら、でも本人を苦しめるだけなら無駄になってしまふ。

最近胃ろうはしないけど、胸の血管に高カロリーの栄養液を入れる中心静脈栄養や、鼻に管を通す経鼻胃管を選ぶ人がいます。でも、それも胃ろうと同じ単なる延命です。命はいずれ終わるという覚悟が要ります。— 医療の側も変わる必要があるのでしょうか。



— 著書では、老衰による死は「苦しまない」ということを強調していますね。苦しまないと分かれれば、家族はほっとしますから。実際ホームで立ち会わせていただく自然な最期は、例外なく静かで安らかです。食べられなくなったら無理して食べさせない。胃ろうなど余計なこともしない。するとなね、眠って、眠って、すーっと穏やかに旅立つんです。10年たって一つ確かなことは、みんな最期は眠っちゃうことです。私はホームで痛みを和らげるための医療用麻薬を使ったことが一度もない。必要ないんです。

いしとび・こうぞう 61年慶応大医学部卒。東京都済生会中央病院の血管外科医として先端医療に携わった後、05年から東京都世田谷区立の特別養護老人ホーム「芦花(ろか)ホーム」の常勤医に。著書に「平穏死」のすすめ、口から食べられなくなったらどうしますか(講談社)など。

— もつすぐお盆休みです。家族が集まるときに、どんな話をしておくといいですか。何より本人の思いを家族に伝えておくことです。家族の迷いが軽くなる。私がお話したことや著書を材料にして、人生の最期をどう過すか、それぞれの思いを口に出してもらえたらうれしいですね。